「チョッパリ」とオクスニ:
小林勝の文学における「もう一つの」朝鮮

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-07-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 原, 佑介, Hara, Yusuke
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062998

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Core Ethics Vol. 7（2011）

論文

「チョッパリ」とオクスニ

――小林勝の文学における植民者と「もう一つの」朝鮮――

原　　佑　介*

1. はじめに

小説家小林勝は、1927年植民地朝鮮に植民者二世として生まれ、1971年に日本で死んだ。43年という比較的短い生涯であった。戦後日本において、植民地朝鮮を終生の課題とした稀有の文学者である。生年も没年も三島由紀夫〔1925-1970〕とほぼ同じであるが、戦後日本文学史における位置づけについては、両者の間には大きな隔たりがある[1]。

在日朝鮮人作家の李恢成[2]は、小林の死に際して、「ぼくは書評で『蹄の割れたもの』をたしかに現在の日本文学が注目せねばならぬ異彩の作品として書いたが、不幸にして日本文学界はこの作品に正統な評価をくだすほどまだ成熟してないように見えた[3]」と述べているが、状況は昨今も大きくは変わっていない。最近の研究においてもなお「いまではほとんど忘れられた感のある[4]」と評されるような状態は続いている。90年代以降、植民地問題に対する関心の後押しを受ける形で、小林勝の文学を新たな視角でとらえ直そうとする動きが徐々に見られるようになってきたものの、より深い再検討はこれからの課題である[5]。

磯貝治良は、戦後日本文学を批判して、「戦後に書かれた日本の膨大な文学作品の山脈を考えるとき、歴史的にも現実的にも民族的にも、もっとも緊密な間柄にある朝鮮および朝鮮人像の描かれようは、あまりにも寒々としている。ことに戦後の日本文学がになわなければならない最もリアルでアクチュアルな主題が何であるかを考えるとき、植民者と被植民者というのっぴきならない経験をへて、いまもなお不合理な深淵を埋めえずにいる日本と朝鮮、日本人と朝鮮人の問題が充分に描かれていないのは、どこかいびつな事実ではないだろうか」と述べた上で、「そんな状態にあって、小林勝の存在は貴重であり、作品の質量とも群を抜きんでている」と評価している[6]。また、本稿でも取り上げる小林の代表作「蹄の割れたもの」〔1969年〕を精密に分析した高澤秀次は、「彼〔小林勝〕の殆どの日本人から忘れられた作品群は、金石範に代表される優れた在日朝鮮人作家の文学作品に例外的に拮抗する、植民地体験を持った日本人（チョッパリ）による『マイナーな日本文学』として戦後文学史に再登録される資格を有していよう〔ルビ原文〕」と、小林文学の読み直しを訴えている[7]。

ところで高澤は、小林勝文学の主題を、「戦後日本の潜在『難民』の歴史的『離散』（ディアスポラ）」と簡潔にまとめている[8]。これは、小林勝の文学を読み解く上できわめて重要な指摘だと思われる。戦後日本社会は、「過酷な状況の中で生死の境をさまよいながらの引揚げ、引揚げ後の生活再建での艱難辛苦といった労苦」を味わった「海外居住者」という歴史像の他に、植民者の歴史体験に対してどのような省察を加えてきただろうか[9]。あるいは、「引揚げ」の集合的記憶とは対照的に、それに先立つ彼らの植民体験に対する認識はどの程度深まってきただろうか。植民地で生まれた「内地人」（植民者二世、三世など）の植民地における歴史、そして彼らの戦後史となると、植民者一世との差異さえほとんど考慮されてこなかったのが現状である[10]。

そのような中、小林勝に注目することには、どのような意義があるのだろうか。そもそも彼の文学が忘れ去られ

キーワード：小林勝、植民地、朝鮮、戦後日本、植民地主義

＊立命館大学大学院先端総合学術研究科　2007年度入学　共生領域、日本学術振興会特別研究員（DC2）

たということは、いわゆる「引揚者」やシベリア抑留を経た者を含む「復員兵」の、植民地帝国の崩壊を契機とする「歴史的『離散』」の体験が忘れ去られ、戦後日本社会において彼らが不可視的な存在となった、ということを示唆する。戦後日本文学および思想史研究は、植民地の解体にともなって旧「内地」に移住した人々の体験を「歴史的『離散』」としてとらえ、その歴史的意義を評価しようとする視角が不足していたのではないだろうか。このような問題意識を持つ時、植民者二世であった小林勝の文学が、この視座を獲得する上で重要な位置にあることがわかる。なぜなら、「歴史的『離散』」という文脈において、人格形成期の根拠地が植民地にあった（より具体的にいうならば、実質的な故郷と呼ぶべき場所が植民地にあった）植民者二世や三世らの「引揚げ」体験は、「内地」生まれの植民者一世や軍人たちの移動以上に「歴史的『離散』」と呼ぶにふさわしいからである。戦後日本においてほとんど捨象されているが、彼らの「引揚げ」は、その実質において、帰国ではなく移住、移民であった。その意味で本稿筆者は、植民地で生まれ育った「内地人」の戦後文学は、日本帝国の形成と解体が「内地人」の側にもたらした「歴史的『離散』」の本質を最も先鋭に表わしていると考える。植民者二世、三世らの出生と植民地での生活体験、「引揚げ」、そして戦後日本社会への定住という一連の「歴史的『離散』」の意味を振り返る時、高澤が戦後日本に投げかける「潜在『難民』」という言葉は重い。

植民者二世としての出自と生活に終生こだわり、それをほとんど唯一の創造の源泉とした小林勝の文学を見直すことは、戦後日本において「潜在『難民』」化した植民地生まれの「内地人」を可視化し、その「離散」の歴史的意味を再考することにつながるはずである。本稿では、その取り組みの一環として、小林勝の文学に表れる朝鮮人表象の特徴と、植民地期の朝鮮人と戦後日本における在日朝鮮人の描き方とにどのような連関があるのかに着目し、その表象、連関がどのような文学的意図に基づいているのかを考察する。また、その意図を同時代の在日朝鮮人文学者がどのように受け止めたかについても若干の考察を加える。

2.「生きた総体」としての朝鮮

43 歳で病死した小林勝の最後の単行本は、死後に公刊された『朝鮮・明治五十二年』〔1971 年〕である。これは、植民地朝鮮を舞台とした小説のみで編まれた小説集である。あとがきで、彼は次のようなことを書いている。

> この小説集の中には、朝鮮に長く住み、朝鮮人に直接暴力的有形の加害（ママ）を加えず、親しい朝鮮人の友人を多く持ち、平和で平凡な家庭生活をいとなんだ、もしくは、いとなもうとした日本人が登場してくる。かつて、下積みの、平凡な日本人の多くがそうだったと思う。それらの人々、あるいはいま中年に達した、それらの人々の子供たちの多くが、二十数年をへだてた今、朝鮮を懐かしがっていることも知っている。
>
> しかし、私は私自身にあっては、私の内なる懐かしさを拒否する。平凡、平和で無害な存在であったかのように見える「外見」をその存在の根元にさかのぼって拒否する。ことは過去としてうつろい去ったのでは決してないのである。敗戦によって、あれらの歴史と生活が断絶されたのでも決してない〔傍点原文。⑤ 319〕[11]。

「内なる懐かしさを拒否する」という考え方は、植民地朝鮮で生きた自身を含む植民者たちの「歴史と生活」が戦後もなお継続しているという認識から導き出されたものであった。小林文学の根幹を成すこの歴史観に、同時代の複数の在日朝鮮人文学者が共感を示している[12]。とりわけ在日朝鮮人二世である詩人の呉林俊は、こうした歴史観に対する共感を含め、小林勝に対して深い友情を寄せていた[13]。

呉林俊は、1926 年に朝鮮の慶尚南道で生まれ、幼少期に渡日した。戦争末期には「皇軍兵士」として従軍を経験している。戦後は日本で文学・批評活動を展開したが、1973 年小林のあとを追うようにして急逝する。「日本帝国主義の朝鮮植民地支配が終り、そのつぎの時代から連続する日本民主主義体制が形態それ自体としては断絶しているにもかかわらず、依然として朝鮮人は視野から除外されたままである[14]」と、朝鮮認識の歪みの批判を核に、戦後日本社会の継続する植民地主義を告発し続けた呉林俊は、小林の告別式の弔辞で次のように故人に呼びかけた。「朝鮮人が、日本にいる朝鮮人がその戦前と戦後をわけて考えることができないように、あなたにとっての〈朝鮮〉もまた、決して断絶した世界として成立することは不可能でありました[15]。」

このように呉林俊は、小林が自身と同じように、植民地支配の終焉をそのまま歴史の断絶と見ず、その前後を連続したものとしてとらえようとしたことに注目していた。事実、小林は晩年、歴史の連続性を強く主張するようになっていた。1970年に刊行された作品集『チョッパリ』のあとがきでも、彼は次のように述べている。

> 私にとって朝鮮とは何か、という問題を考える時、私は、私がかつて「植民地朝鮮」で生まれ、軍の学校へ入校するまでの十六年間をそこで過したという直接体験を含む「過去」の問題としてそれを捉えようとするわけではありません。もちろん、日本および日本人の歴史にとって、朝鮮および中国に対するその「過去」は、現在の日本と日本人形成について考える場合にぬきさしならない重要なものではありますが、私は、それを、すでに終ったもの、完了したもの、断絶したものと考えることができません。いやむしろ私は日本にとっての朝鮮や中国とは、その「過去」から現在へ、現在から未来へと連続して生きつづける一つの生きた総体と考えるのです〔④252〕。

小林は朝鮮を現在と断絶した過去としてとらえようとはしなかった。この姿勢が、朝鮮への郷愁を拒否する方向へと彼を導いたのであった。呉林俊もまた、郷愁を安易に口にする元植民者に警戒感を示している。「わたしは朝鮮に『植民』した人々が、『朝鮮はなつかしい、朝鮮の山河はいまでも瞼に焼きついている』と語るとき、その言葉におもわず戦慄する。日本帝国主義のたくみな対朝鮮政策によって、日本人の意識の流れに、朝鮮および朝鮮人を蔑視する『思想』がかもし出されてきた。この事態を認識し、そこから再出発して朝鮮については『だまされていた』のだから、これからは『だまされないようにする』という覚悟の裏付けだけでは、表層を依然としてかすめ去るだけのことにしかならないであろう[16]。」このように、小林と呉林俊は、植民者の郷愁の拒否と、歴史の連続性という二つの相通ずる考え方を共有していた。

野間宏は、小林勝の死後、その文学と在日朝鮮人文学との親近性を次のように指摘した。「小林勝こそは、他の誰よりも今日の在日朝鮮人の文学の時代をその心と耳に収めることによって彼自身の文学の根と朝鮮人の文学の根との同根性を十分に見とどけるべきであったし、知りつくすべきであったのである[17]。」在日朝鮮人文学の問題意識を一様に小林の文学と同根であるとは言い切れないが、呉林俊のように、小林勝の文学に「同根性」を見出す在日朝鮮人がいたことは確かである。なかんずく呉は、近代化を成し遂げた称賛すべき明治の歴史像と、戦前と戦後を断絶したものと見る歴史観という相矛盾する歴史認識の奇妙な共存が、朝鮮の欠落という一点において共犯関係にあることを強く批判していた。小林と在日朝鮮人文学者の「同根性」は、ひとつには、アジアの欠落を覆い隠す役目を果たしている歴史の断絶という認識の欺瞞性への苛立ちが挙げられるだろう。

3.「もう一つの」朝鮮――「万歳・明治五十二年」

小林勝は、戦前戦後を問わず、日本人と朝鮮人の心温まる交流といった主題で小説を書くことは決してなかった。その代わりに彼は、朝鮮人との強い緊張を孕んだいびつな関係を執拗に描き続けた。この傾向は60年代なかば以降はっきりとした形をとるようになる。戦後日本が舞台となる作品では、在日朝鮮人との不快な関わり合いに触発される形で、植民地時代の朝鮮人との同様に不快な関わり合いの記憶がよみがえり、それに苛まれる日本人植民者二世の葛藤が描かれる。小林にとって、歴史そのものがそうであるように、少年期に植民地で出会った朝鮮人と、戦後日本で出会う在日朝鮮人は、決して互いに断絶した存在ではなかった。

朝鮮人の形象化においても、小林は日本人のよき理解者、同伴者となるような朝鮮人類型にはまったく興味を示さなかった。日本人の主人公と深く関わるのは、主人公に激しい違和感や恐怖を喚起する朝鮮人か、そうでなくとも、主人公との一見平穏な関係にきしみを内包するような朝鮮人ばかりである。しかしこれは、必ずしも彼がそのような朝鮮人としか接することがなかったということを意味しない。むしろそのことは、小林がその文学活動においてどのような朝鮮人像を模索することが重要であると考えていたのかを示している。彼は、日本人との関係に破綻の危機を含まないような朝鮮人は存在しないし、するとしてもそのような朝鮮人は書くに値しないと考えていたと思われる。

慶尚南道の晋州で生まれ、慶尚北道の中心都市大邱で16歳までの少年時代を過ごしたため、小林の小説には、大邱を舞台にしたものや、戦後日本に生きる植民者二世が大邱を追想する場面のあるものが多い。中編「目なし頭」〔1967年〕もその一つだが、主人公の沢木が次のように大邱を回想する場面がある。「朴憲永は苛酷な日本憲兵と日本警察の追及を尻目に、第二次大戦が終るまでの長い間、大邱で煉瓦焼場を営んで暮していたらしいという話を戦後に沢木は聞いて肝をつぶしたことがある。歩兵第八十連隊の所在地大邱で、沢木は煉瓦焼場の横の道を歩いて四年間中学へ通っていたのだ〔④ 209〕。」

朴憲永（パク・ホニョン）〔1900-1956〕は、朝鮮共産主義運動の重要人物である。朝鮮民主主義人民共和国の建国に際して副首相兼外相を務めたが、朝鮮戦争停戦後粛清される。引用文であるが、大邱というのは小林の事実誤認で、朴憲永が潜伏したのは全羅南道の光州であった[18]。煉瓦工場を経営していたわけではなく、一介の労働者に扮していたというのが実状のようである。朴憲永はおよそ5年間そこで地下生活を送り、そのまま1945年8月の解放を迎える。この間に彼は聖書の行間に隠しインクで書いたといわれるいわゆる「八月テーゼ」を執筆するのだが、これは解放直後に帰還したソウルで発表されることとなる。このように、実際に朴憲永は官憲が強く警戒していた共産主義活動を、潜伏中にも続けていた。なぜ小林が朴憲永の潜伏先を大邱と誤解したのかは不明だが、ここで問題としたいのは、続く次のような文章である。

> 沢木の眼に残っている高いのどかな煙突が、その時にわかに不気味な像に変った。沢木の大邱は広々とした二十間道路と軍服にあふれた、にぎやかな街であるが、その中に、もう一つの大邱が、眼を光らせ息を殺してひそんでいたのだという実感が恐ろしいたしかさで沢木をおしつつんだ〔⑤ 209〕。

実際には存在しなかったわけだが、通学路であった一見平穏な風景の中に、植民者たちにとって危険な存在である独立運動家が潜んでいたのだということを戦後ようやく知り、沢木は戦慄する。朴憲永のような著名な活動家だけでなく、多数の朝鮮人が彼と同じように憎悪を隠してすぐ隣で生きていたとすると、「煉瓦焼場」だけではなく、朝鮮人の生きるあらゆる場所が「不気味な像」に変わる可能性を持っていたことになる。

ここで小林が描く植民地の風景に、彼が見た朝鮮が凝縮されている。彼は常に植民地支配の脆弱性を自らの日常の中に感じていた。少なくとも戦後そのように想起している。支配の脆弱性は、その正当性に対する疑問へと彼を導かずにはおかない。植民地での自分の生活空間に溶けこんでいたはずの「のどかな煙突」が、「朴憲永」の存在が明るみに出ることによって突如として「不気味な像」に変わる。一見平穏であった「のどかな煙突」が実は自分に対して害意を秘めていたということを悟り、そうと知らずに通学路をのん気に歩いていた自らの危うい無邪気さに凍りつく。彼の文学が追究したのは、「もう一つの大邱」、植民者の日常の中に「眼を光らせ息を殺してひそんで」いる、もう一つの朝鮮であった。

ところで、この「煉瓦焼場」のくだりは、朝鮮そのものだけでなく、小林が抱いていた朝鮮人イメージを象徴的に表しているともいえる。彼が描こうとしたのは、「のどかな煙突」のような外見を装いながら、その奥にまったく別の顔を隠している朝鮮人たちのもう一つの、そして、彼によれば真の姿であった。小林の描く日本人と朝鮮人の関係の持つ危うさの原因は、朝鮮人がいつ何がきっかけで日本人に対して敵対的な真の姿を現すかわからない、わからないだけでなく今にもそれが露出しそうに思える、という不安感にある。

磐石に見える日本人による植民地支配が、実は支配者が思っているよりもはるかに脆弱なものであることが露見した時に、復讐に遭うかもしれないという恐怖が現実味を帯びて植民者たちを襲う。当初は「京城」の騒擾事件に過ぎなかった1919年3月の抗議運動が一気に朝鮮半島全土に拡大するにおよび、その騒乱の波にのみこまれて恐慌状態に陥る田舎町の日本人社会を描いた「万歳・明治五十二年」〔1969年〕[19]では、植民者に忍び寄るこの恐怖が活写されている[20]。

郷里の矮小さに心底嫌気がさした主人公の大村は、自由を求めて植民地に脱出する。彼は結局、朝鮮慶尚北道の山奥の町にある朝鮮人実業学校の書記という地味な役職に収まるのだが、そこで1919年3月の騒乱に巻きこまれる。他の植民者たちとちがってその土地に対する愛着も所有意識もほとんどない大村であったが、ある事件を契機に、自身の意図とは裏腹に植民者社会に組みこまれていくこととなる。

朝鮮人民衆の計画的な示威行動の勃発によって、大村はそれまで知らず知らずのうちに享受していた特権的な安逸を完全に失う。街が万歳の声で揺れ動く中、慌てて猟銃で武装した彼は、ふと「オムラさん、オムラさん」と彼を慕っていた金容泰という学生のことを思い出す。夏休みのある日、大村は彼と一緒に川遊びをしたのであった。大村は金容泰とともに洛東江でのんびりと泳ぐのだが、「無限の自由の土地」という植民者の幻想によって、植民地の風景と人々は牧歌的な虚像の中に押しこめられる。その一方、日本の郷里の川が対照的に苦々しく思い出される。窮屈で抑圧的だった郷里と自由な植民地の町を対比させ、大村は感慨に耽る。洛東江に魅了された彼は思わず、裸になって河辺で蜆を採っている朝鮮人の子供たちは幸せだ、という言葉を金容泰に漏らす。大村の目には、彼らは少年時代の自分自身と違って自由であるかのように映るのであった。これに対して金容泰は、彼らは自分たちが遊んだり食べたりするためでなく、売って現金を手に入れるためにそうするのだ、と釘を刺す。そして大村の考えとは逆に、昔は貧しかったが今よりもずっとよかった、と反論する。金容泰のささやかな植民地批判も、植民者の特権を無意識的に享受し植民地を理想化している大村は気づかない。この回想のあと、朝鮮人群衆の示威行動がいよいよ本格化し、大村自身もまったく意図しなかった虐殺が起こる。警察署に押しかけた群衆に向かって恐怖のあまり無意識のうちに発砲し、自分が勤めている学校の生徒たちを含む数人の朝鮮人を殺してしまうのである。

連日半島全土から騒擾の報が届けられる中、事件の三週間後、大村は中国人街にあるなじみの中華料理店で金容泰が二人の学生とともに食事をしているのを発見する。飲食店への出入りは校則で禁じられているため、大村は自らの言葉に白々しさを覚えながらも彼らを叱責する。しかし彼らは、嫌悪感と敵意をむき出しにしてそれを無視する。大村は、「得体の知れぬ無気味さに気圧されそうになりながら」も、騒動に加担したのか、と学生たちを追及する。すると、挑発的な態度をとる彼らの顔に、「冷笑とも憎悪ともつかぬ暗い翳」が浮かぶ。金容泰はもはや、無邪気に大村を慕い、洛東江でともに泳いだ金容泰ではなかった。そして大村は、朝鮮は日本ではなく、朝鮮人は日本人ではないという当たり前の事実を悟り、戦慄する。

> 突然、皿にかがみこんでいる彼の背後で、二人の朝鮮人が喋り出した。その聞きなれない異国の言葉は彼の心を荒々しくかき乱した。すると、三人の学生が烈しい口調で何やら喋りだした。それもまた朝鮮語であり、彼は完全に朝鮮語の渦の中に置かれた。洛東江の流れに身をまかせて下っていった時の金容泰の舌たらずの日本語はどこにもなく、あの日の金容泰の姿は消え失せ、朝鮮語を喋る朝鮮人がそこに居た。それは金容泰をはじめ、郷里にいた頃にくらべたならば多少は具体的現実的に理解することが出来ると大村が考えていた、その朝鮮人学生たちではなかった。一切の理解を拒絶した、正体不明の、薄気味悪い外国人がそこにおり、そして彼をとりまいて、理解できない言葉で喋っていた。恐怖が大村の全身を襲った〔傍点原文。⑤179〕。

大村は、自分が流れ着いた朝鮮に「朝鮮語を喋る朝鮮人」が存在することを、支配関係が揺らいだ後になってようやく実感する。柾木恭介はその小林勝論で「植民地主義はその支配者自身の意識から感性の根もとまで腐らせる[21]」と強い調子で批判しているが、朝鮮に「朝鮮語を喋る朝鮮人」がいるという至極当然のことを、身の危険を感じるようになって初めて実感するという恐るべき感性の鈍化は、植民者二世の小林自身が直面した問題でもあったと思われる。「一切の理解を拒絶した、正体不明の、薄気味悪い外国人」たちの領域で激しい恐怖に駆られた大村は、食事を終えるやいなや、彼らの敵意に満ちた視線を感じながら、逃げ出すかのように店を出る。そうして、通りで背後から「ヒトゴロシ！」という日本語を浴びせられ、「何の束縛も、恐怖もない何処かへ逃げて行きたい、という火のように烈しい衝動」を覚える。しかし、郷里からも植民地からも疎外された植民者には、もはやどこにも行き場はなかった。

大村は、自由の地を求めて植民地へ脱出してきたはずであった。それがこのように、植民地の異質性を実感するにおよび、激しい束縛感と恐怖にとらわれる。この小説は、暴力によってやむなく抑えこまれている植民地の異質性に対する植民者の潜在的な恐怖とやましさを描いている。大村の場合は自身を「根なし草」の一時滞在者と割り切っているが、作者の小林自身は植民者の子としてその地で生まれ育っており、植民地の異質性に対する感性が大村のような植民者一世よりもさらに鈍くなる条件下にあったといえる。植民地末期の朝鮮人青年を主人公にした中編「瞻星」〔1965年〕で小林は、植民者二世にとっての植民地を次のように説明している。「この植民地うまれのいわば二

世たちにとっては、朝鮮の独立などということは、この世に絶対に起こり得ない、架空の物語にすぎない、そこが植民地へのりこんで来た、軍人たち、官吏たち、警官たち、銀行家たち、商人たち、高利貸たち、教師たち、僧侶たち、鉄道員たち、一世とは根本的にちがっているところだった。彼等一世たちは、朝鮮が植民地化されてまだ三十余年を経ているにすぎないことを、直接体験した独立運動の生々しい出来事と共に知っていた。しかし、二世にとっては、朝鮮は彼等が生れた時から日本であった。ここでは三十年という年月などには何の現実感もない。彼等は日本に生まれていた。だから、それは日本内地と共に永遠であった〔傍点原文。⑤286〕。」大村の逃避行の核には、生まれ育った朝鮮を異郷として再構築していく上で小林自身が体験したであろう葛藤があると思われる。

4. 異質性の剥奪――「蹄の割れたもの」

朝鮮人に対する植民者の恐怖とやましさの顕在化というモチーフは、「万歳・明治五十二年」のみならず植民地朝鮮時代を扱った多くの小説で取り上げられている。支配者の側から見れば平穏無事な、被支配者の側から見れば屈辱的な関係の揺らぎやきしみ、甚だしくは崩壊が、顕在化の契機となる。関係の揺らぎは、植民者の一見安泰な日常の中で何度でも起こり得るものであったが、その最終的な崩壊は、敗戦によって現実化する。小林勝の代表作「蹄の割れたもの」〔1969年〕では、日本人少年と朝鮮人女中との関係の変化を通して、植民者二世の恐怖と羞恥心が克明に描かれている。

磯貝治良は、植民者の子弟の心性に関連して次のように述べている。「日本人少年たちが親の世代によって否応なく植えつけられた、朝鮮人にたいする傲慢と蔑視の裏には、混沌未分のコンプレックスがひそんでもいた。それは、朝鮮の地にあって、周囲の世界から自分が疎外されているという、異邦者＝よそ者意識であった[22]。」小説「蹄の割れたもの」で切りとられたこの「異邦者＝よそ者意識」の噴出の瞬間は、その瞬間を様々な物語設定の中で繰り返し描いた小林の諸作品の中で最も迫真的な部類に入るものである。

「蹄の割れたもの」に登場する朝鮮人女中エイコは、日本人主人公の理解を超えた存在として小林が描く朝鮮人の典型である。彼女は、異常な執拗さで飼犬を虐待して見せるなど、不可解な面のある女であった。戦後日本に生きる医師河野がエイコと出会ったのは、植民地朝鮮で暮らしていた中学生の時である。彼女は河野少年と同世代であったが、すでに夫を持つ身であるゆえか、彼を惹かずにはおかない性的魅力を持っていた。少年は、エイコの豪放な性格をいかにも朝鮮的だと感じて不愉快に思うと同時に、彼女に対して畏怖に似た感情を抱くのであった。エイコは、本名については頑なに口を閉ざす。「ぼくがききたかったのは前の本当の名前だよ」と少年が言うと、見る間に強張った顔つきになり、「ほかにはもうどんな名前もないんだから、それをわすれるなって役人がいったよ、だからわたしはエイコって名前しかもうないんだ」と言い捨てる〔④34〕。日本人に対してはまったく心を許しておらず、むしろ軽蔑しているようなふうさえある。

エイコは、仰向けになった犬の腹を思いきり蹴飛ばしたり、その犬をハンマー投げの要領で振り回して投げ飛ばしたりするなど、常軌を逸した行動をとって少年を怯えさせる。少年は心中で「お前は悪い奴だ、ほんとうに悪い奴だ、お前は残虐だ、朝鮮人はどいつもこいつも残虐だ」と彼女を罵るのだが、自分の「生活とはまったく異質の、まぎれもなく日本人ではない強く濃いにおい」に、嫌悪感を覚えながらも魅了されてしまう。そうした相反する感情に揺れる河野少年であったが、幼時から植えつけられた嫌悪感はやはり根深い。エイコが母に時折差し入れる朝鮮の食べ物に対しても、物心ついたころから朝鮮人は不潔だという観念に囚われてきた少年は生理的な拒否反応を示す。

ある夏の日河野少年は、両親のいない家の居間でエイコが仰向けになって眠っているところに出くわす。いつもは朝鮮服姿のエイコだったが、その時は手足のあらわになったワンピースを着ていた。誘惑に屈した少年は、思わず彼女の腹に手と顔をおしつける。その様子を、偶然その時訪問した級友に盗み見られたと思いこんだ彼は、支配者としての恥の感覚に襲われ、不潔な朝鮮人の女に触れたという嫌悪感と後ろめたさから、狂ったように石鹸で体を洗う。

級友に見られただろうか、という疑問に苛まれながら勉強部屋に入った少年のところへ、エイコがやってくる。何食わぬ顔で、自分は眠っていた、と言うエイコであったが、出て行け、と怒鳴る少年を見て、突然人が変わった

ように冷酷な笑みを浮かべる。「ぼくの胸の中が、真青になった。こいつ、起きていて、はじめから知っていたんだ！
すると、喉で笑いながら、じいっとぼくを見つめているエイコの顔が、次第次第に恐ろしくなってきた。一体、何を腹の中で考えているのか見当もつかない、別のいきものに対しているような恐ろしさだった。」出て行け、と少年は再度エイコの表情に怯えながら命じるのであるが、立ち去っていくエイコが、戦後も彼を呪縛することとなる言葉をつぶやく。

> ぼっちゃん、ほんとにわるい子になったね、だけど、みんなおなじだものね。そして、またしても喉の奥で含み笑いしながら実に優しく囁いた、ほんとに、わたしはよくねむっていたよ、なんにもしらなかったよ、チョッパリ……〔④48〕。

「チョッパリ」とは、朝鮮人が日本人に対して用いる蔑称で、この小説の題名「蹄の割れたもの」の原語である。朝鮮人の目には奇異に映る下駄や草履を履く習俗を持つ日本人を嘲る隠語であったという。その記憶にいざなわれ、河野はさらに敗戦直後の時のことを思い出す。

至る所に手製の太極旗が立ち、町の容貌は一変する。街だけでなく山や空などの自然でさえもよそよそしく敵対的に感じられる中、少年は、町の中心部にある下宿先から汽車に乗って近郊の実家に引き返す。簡易裁判所や警察、拓殖銀行支店、日本人小学校といった植民者の建物の上に太極旗がひるがえっているのを目の当たりにした彼は、しばしの間呆然と立ちすくみ、涙を流す。その直後彼の前に現れたのは、手に旗を持った朝鮮人の集団であった。少年はその中にエイコの姿を見出す。

> 一団とすれちがう時急にエイコは顔を固くすると、するするとぼくの方へやってきた。能の面だ、とぼくは思った、はじめて逢った時のあの能の面だとぼくは思った。エイコ、と思わずぼくは言った。するとエイコは強く首をふった。
>
> そうだった。エイコなんて、しょせん架空のものであり、日本人だけがその実在をおろかに信じていた虚像にすぎなかったのだ。エイコなんていう女は、はじめからどこにもいなかったのだ。
>
> あたしは、オクスニ、と女はゆっくり言った。不意に聞きおぼえのある喉の奥の含み笑いがぼくをふるわせた。彼女はきらきら光る眼で、ぼくの顔をじっと見た。その時、ぼくは電光のように、彼女の眼の中の言葉を読みとった、あたしはオクスニ、そして、あんたは、チョッパリ、と。そのまま彼女はぼくから離れて行った。ぼくが見送っていると、オクスニがぼくを指さし、女たちがどっと笑う声が聞えた〔④53-54〕。

「あんたは、チョッパリ」というエイコの捨て台詞は、少年が彼女の目から読みとった彼の自意識の産物であって、実際に発せられたものではない。にもかかわらず、なぜ河野少年はエイコが「オクスニ」と名乗ることと、彼女が自分を「チョッパリ」と呼び捨てることとの間に敢えて関連性を見出したのだろうか。また、「チョッパリ」という隠語は、朝鮮人が日本人を一括りにしてけなす言葉であるが、なぜ作者の小林は、日本人を「チョッパリ」とけなした朝鮮人女中に「エイコ」という日本名を付したのだろうか。ここには、この小説の核となる作者の意図が働いているように思われる。

「蹄の割れたもの」では、朝鮮人女中の名が「エイコ」から「オクスニ」に変わっていくその変化そのものが、植民地支配とそれに支えられていた植民者の世界観の崩壊というドラマの意味を象徴的に表現している。河野少年は、敗戦時に再会したエイコの眼差しに、「あたしはオクスニ、そして、あんたは、チョッパリ」というメッセージを見出した。少年にとって、彼女がオクスニになったことと自分がチョッパリであり続けることは、表裏の、不可分の関係にある。支配関係が劇的に崩壊した瞬間、かつての被支配者は他にいくらでも代替が可能な「エイコ」という虚名から代替不可能な「オクスニ」という本名へと移ったのに対し、かつての支配者は依然「チョッパリ」という集合名詞の中に取り残されたままである、という非対称が生じた。「エイコ」から「オクスニ」への変化は、この非対称を描くために作者が用意した装置であるように思われる。

小林は、朝鮮人エイコがオクスニへと転換した瞬間を切りとることによって、日本人が朝鮮人を、その本名を無

視して日本名で呼ぶことが、朝鮮人が日本人を蔑称である「チョッパリ」と呼ぶことと相似した暴力性を持っている、ということを暗示した。両者はともに、個人の固有性を剥奪する機能を果たす。エイコにとっては、雇い主の子である河野少年を「ぼっちゃん」と呼んでいた解放前も、彼は集合名詞としての「チョッパリ」の一人に過ぎなかった。性的いたずらの経験を通してそのことが明らかになり、少年は心に傷を負うのであるが、実は自身を含む植民者たちが彼女を「エイコ」と呼ぶことが、「オクスニ」という本名が示す彼女の固有性を奪い去り、彼女を集合名詞の中に閉じこめていたのだということには気づかない。解放を迎えたエイコは「オクスニ」という本名を取り戻し、「エイコ」の中に封じこめられていた自身の固有性を回復する。しかし、植民者の側は、植民地期も敗戦後も、「チョッパリ」のままなのである。この落差は、朝鮮人が解放を契機として自分はもはや被支配者ではないと宣言できたのに対し、日本人は敗戦によっても植民者であることから都合よく降りることはできない、ということを示している。朝鮮人女中の変化そのもの以上に、敗戦を迎えてさえ植民者二世の少年に変化が起こらず、自らが「チョッパリ」であることを戦後も引き受けていかざるを得ないのだ、という訴えかけが、この小説が投げかける最も重要なメッセージであるように思われる。

ところでオクスニの場合、解放によって「エイコ」という名は過去のものとなった。無論、彼女が「オクスニ」という本名を奪い返すことによって、「エイコ」という虚名に象徴される植民地支配の過去の呪縛から完全に逃れたと一概にいうことはできない。それでも、彼女はもはや「エイコ」という名を押しつけられ、エイコであるかのように振舞うことを強制されることはない。しかし、在日朝鮮人にあっては必ずしもそうではない。植民者が戦前も戦後も「チョッパリ」であるように（小林においては、そうでなければならないように）、彼らもまた、多かれ少なかれ植民地主義が押しつけたそれぞれの「エイコ」を背負って戦後日本を生きなければならなかった。このアイデンティティの連続性を、対立する二つの世界の周縁部にそれぞれ立ち尽くして向き合う形でありながらも共有しているという認識こそが、冒頭で触れたように呉林俊を小林勝への共感に向かわせた最大の理由ではなかっただろうか。

5. おわりに

以上２編の小説を見てきたが、小林勝が描く植民地期の朝鮮人には重要な共通項がある。それは、日本人に潜在的な恐怖感を抱かせるような、日本人には見えない顔を隠し持っている、ということである。その顔の存在を感じとるがゆえに、小林の主人公たちは、他の植民者たちのように朝鮮人を単に不潔、野蛮、愚鈍などと片づけることができない。小林の主人公たちにとっては、朝鮮人は自己とは明らかに異質な存在であり、彼らはそのことを感覚的につかんでいるがゆえに、個々の朝鮮人が持つ固有性に相応するだけの圧迫感を受ける。だからこそ彼らが朝鮮人に覚える不快感は、単純な蔑みや嫌悪だけではなく、畏怖ややましさの感情をもかき立てずにはおかないのである。

たとえば、「蹄の割れたもの」で、河野少年がエイコの作った朝鮮の料理や朝鮮人の洗濯方法などに対して生理的な拒絶反応を示す場面があるが、その直後、物語は朝鮮人の生徒たちが「皇国臣民の誓詞」を斉唱させられる場面へと移る。朝鮮人中学生たちが「我等ハ皇国臣民ナリ。忠誠モッテ君国ニ報ゼン」と唱えるのを聞いて、河野少年は激しい違和感を覚える。

> 違う、とぼくは教えに反して思った。お前らは皇国臣民なんていうもんじゃない、お前らはおれたち皇国臣民とはちがう、お前らはおれたちと違う、生活がぜんぶ違うようにだ、お前たちは別のいきものなんだ……〔④43〕。

ここには、支配者としての単純な優越意識という枠組のみではとらえられない複雑な感情が渦巻いている。少年は、朝鮮人という一個の他者が自己とは確実に異質であるにもかかわらず、その異質性を覆い隠して自己のうちにとりこもうとする支配者の自己催眠に似た欺瞞を息苦しくも感じている。それだけでなく彼は、朝鮮人が「皇国臣民」になりきれないのは程度ではなく本質の問題だと直観している。

在日朝鮮人詩人の金時鐘は、小林の死に際し、彼が描いた朝鮮人を評して、「彼のどの作中人物も感じの好い朝鮮

人ではなかったが、それでいて私の同胞意識に決して不快を押しつけるといったものでもなかった。それは自己と部厚く対峙しているところの、『自己』としての朝鮮人だった。私の深部そのものを見透かしているようで恐く、またいとおしい朝鮮人[23]」だった、と述べている。ここでの「作中人物」とは、おそらく本稿で見てきた植民地期の朝鮮人だけでなく、戦後の在日朝鮮人も含むと思われる。上では触れなかったが、「蹄の割れたもの」で河野医師がエイコの記憶を呼び覚ますきっかけとなるのは、梨山玉烈という在日朝鮮人の患者である。その言動には、エイコと類似した異常さが漂う。ある女性患者の性生活を勘ぐって堂々と猥談をするなどして、梨山は河野医師にきわめて強い不快感をもたらす。代表作「蹄の割れたもの」だけでなく、こうした日本人主人公に不快感を与える在日朝鮮人は、小林の小説では枚挙に暇がない。そうであるにもかかわらず、小林の描く朝鮮人が、在日朝鮮人である金時鐘をして上のように言わしめ得たのはなぜなのか。

磯貝治良は小林を、「日本人と朝鮮人とのあいだのうずめがたい亀裂を描くとき、植民者にたいする被植民者の眼をとおして描こうとした稀有の日本人作家だった[24]」と評価している。また彼は、「見られる存在である日本人としての作者が、見る側の位置へ踏みこんで自己を照らそうとした[25]」と指摘している。金時鐘の評価には、描く側に立つ小林が、朝鮮人を客体として見るのではなく、描かれる側の立場へと接近することによって内在的に見ようとしたことへの好感が混じっていると思われる。

本稿では詳述しなかったが、小林の諸作品中、最も激越に植民者と被植民者の個人的関係の破綻を描いたものに中編「目なし頭」がある。民族主義運動に加担したとして日本の官憲に拷問にかけられ、それがもとで惨死する朝鮮人青年と、普段彼にかわいがられていたにもかかわらず拷問で心身ともに変わり果てた彼に罵声を浴びせられる日本人少年の緊張感に満ちた関係が描かれている。主人公の沢木は、「蹄の割れたもの」の河野と同様、植民地朝鮮生まれであるが、その彼が「お前は朝鮮に生れて、そこで育ったために、朝鮮人をよく知っていると、少し思い過ごしてはいないか。彼等は、身内ではない。彼等は外国人なのだ。そして、外国人の中でも、いちばん、その正体の見えにくい外国人なのだ〔④226〕」と自問する場面がある。

「同文同種」のスローガンが象徴するように、朝鮮人が他者であるという事実を当たり前の事実とすることができなかったのが、近代日本の対朝鮮の歴史であった。脱亜とは、朝鮮を外なる他者として切り離すことではなく、むしろその異質性を剥奪し、内なる他者として、過ぎ去ったものとして自らの内側にとりこむことで視野から消去しようとする逆説的な論理ではなかったか。時に同じ植民者二世からさえ「朝鮮コンプレックス[26]」と酷評されることもあった小林の苦悩の文学が目指したのは、そのようにしてとりこまれ消去された朝鮮を再び認識し直すために、朝鮮の異質性を徹底的に凝視し、そこからくる不快感、違和感、恐怖感を正面から受け止めようとすることではなかっただろうか。

金時鐘は、かつての朝鮮植民者からもちかけられる「同郷の誼」に対して強い違和感を表明している[27]。植民地朝鮮への郷愁は、朝鮮が日本の一部であり、朝鮮人が身内であるとする発想の残滓である、と小林は考えた。自らのうちにもある朝鮮への郷愁をかくまでも激しく拒絶した小林の姿勢の裏には、朝鮮を外なる他者としてとらえ直し、その異質性を復権させようという意図があったように思われる。呉林俊は、ある評論で小林の「目なし頭」に触れ、朝鮮人の日本人に対する生理的な憎悪を仮借なく描いた小林を評価し、次のように慨嘆している。

> 日本人（イルボンイン）。なんと〈親近〉と免罪との同居している、遠くまた近い世界であることか〔ルビ原文〕。

小林勝は、「内なる懐かしさ」を拒否し、さらに歴史の断絶という免罪符を批判することで、「〈親近〉と免罪との同居」を打ち破ろうとした。その際に彼が執拗に形象化したのが、他者としての朝鮮人であった。植民地期の支配関係の揺らぎや崩壊を描いた彼の作品では、その揺らぎや崩壊は、朝鮮人が植民者に対して自らの固有性を取り戻すための契機となっている。この過程で朝鮮人の異質性に目覚めていく植民者の恐怖は、不潔、野蛮、愚鈍、頑冥といったレッテルの中に被支配者を封じこめる植民地主義的な朝鮮人像を内在的に解体するための苦悩であったといえる。この恐怖をくぐりぬけた時初めて、日本人との類似性と異質性を価値判断の基準とする「宗主国」的な朝鮮人観が打破できるはずだ、と彼の文学は語りかける。では、小林の死後40年が経過した現在の日本で、「われわれ」からの距離によってその優劣を測ろうとする見方は払拭されただろうか。朝鮮半島の人々や在日朝鮮人に対する評

価に「まつろわぬ者」という発想が含まれる限り、小林勝が戦後日本に投げかけた問いは生き続ける。

注

1　会葬者数一つとっても、三島と比べて小林がいかにマイナーな作家であったかが窺える。「巷間伝えるところによれば、三島の場合の会葬者はおおよそ八千人、高橋〔和巳〕の場合で三千人。そして、わが小林、斉藤〔竜鳳〕の場合には二、三百人だった（玉井五一「小林勝の『朝鮮』と斉藤竜鳳の『中国』」『新日本文学』（1971 年 7 月号）91 頁）」

2　本稿の本文中では、在日朝鮮人の名前の表記には漢字を用い、ルビは付さないこととする。ただし、朝鮮民主主義人民共和国および大韓民国の国民の人名表記については、漢字を用いた上、便宜上日本で呼び習わされているカタカナのルビを付すこととする。

3　李恢成「憤怒の人」『新日本文学』（1971 年 7 月号）86 頁

4　朴裕河「小林勝と朝鮮」『日本文学』（2008 年 11 月号）44 頁

5　代表的なものとして、高澤秀次「小林勝論」『言語文化』17 号（明治学院大学言語文化研究所、2000 年）、渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮』（岩波書店、2003 年）、朴裕河「小林勝と朝鮮」『日本文学』（2008 年 11 月号）などが挙げられる。1990 年代初頭のものでは、池田功「小林勝における朝鮮」（明治大学大学院紀要第 28 集、1991 年）がある。

6　磯貝治良「原風景としての朝鮮」『季刊三千里』（1982 年春号）207-208 頁。磯貝の他に、小林勝文学の研究を先駆的に行なった主要な研究者としては、安宇植、愛沢革などが挙げられる。

7　高澤秀次「小林勝論」『言語文化』17 号（明治学院大学言語文化研究所、2000 年）15 頁

8　高澤上掲書、6 頁

9　平和祈念事業特別基金編『平和の礎――海外引揚者が語り継ぐ労苦　追補』（平和祈念事業特別基金、2010 年）の福井健一（同基金理事長）による「まえがき」参照。

10 「在朝日本人」に関する研究は多いとはいえない。先駆的な研究としては、梶村秀樹の一連の研究がある（『梶村秀樹著作集』1 巻（明石書店、1992 年）所収）。その他には、主なものに木村健二の『在朝日本人の社会史』、高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』などがある。植民者二世の生活や意識構造にまで踏みこんだものとなるとさらに少ない。わずかに尹健次「植民地日本人の精神構造」（『思想』1989 年 4 月号。『孤絶の歴史意識』に収録）や高吉嬉『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成―旗田巍と朝鮮・日本』などで論及されている。

11　本稿における小林勝の文章の引用を『小林勝作品集』（全 5 巻）から行う場合、注の簡略化のため、巻数およびページ数を、引用文の末尾に〔　〕でくくった上で挿入する。表記の方法としては、たとえば第 1 巻の 2 頁から 3 頁にかけて文章を引用した場合、〔① 2-3〕とする。

12　ここでは、金石範と朴元俊の文章を引用しておく。

「小林勝にノスタルジヤがなかったのではない（ついでにいえば、日本人の朝鮮に対するノスタルジヤはわれわれ朝鮮人を、少くとも私を非常に気持悪くさせるものだ）。小林勝は人一倍朝鮮に引かれていたのであり、その作品の多くはその牽引力によって書かれたといえる。しかし彼は自分のその「ノスタルジヤ」が何ものであるかを知り、だからそれを拒否することを知っていた。知っていたというより、拒否するに至ったといったほうがよいかも知れない。

〔……〕

ところで、この「懐かしさ」はどこから出てきたものなのか。その因ってくるところを考えれば、〈朝鮮〉が朝鮮人のものではなく日本人のものだという所有意識にあるだろう。これは決して唐突ないい方ではない。朝鮮人の私から見れば、不合理を通り越して極めて理解しがたいことであっても、日本人は朝鮮の所有者として臨んだのだった。（金石範「『懐かしさ』を拒否するもの」『小林勝作品集』第 5 巻、372-374 頁）

「多くの場合、朝鮮および朝鮮人にかんする日本人の発言は一億総懺悔か、もしくは、切ない望郷か、そのいずれかであるが、小林氏はそのいずれでもなく、作家が自己の存在の根元にさかのぼって、かって自分自身決して朝鮮および朝鮮人にたいして〈平凡、平和で無害な存在〉ではなかったとあばきたてている。

〔……〕

これ〔「『懐かしい』と言ってはならぬ」〕は容易に口にすることの出来ることばではない。それどころか『サンデー毎日』（昭和四十六年一月十七日号）は新春特別増大号に〈あゝ、この切ない大陸への望郷〉と題して、梶山季之、後藤明生、安部公房らを動員して、ひとことずつ語らせている。それには〈滅びたものは美しい――センチメントに綴る少年の日の回想〉というタイトルがついている。そのなかで梶山季之は、

〈事実、ソウルの街を歩いていると、なんとはなしに、母の胎内に戻って来たような、そんな安住感に捉われるのである。

おそらく私が、その国で生まれ、育ち、多感の思春期を迎え過ごした土地だからであろう。〉

といっている。さすがに気がひけたのか編集者は〈日本が再び植民地政策の道を歩きだしてはならないことはいうまでもない〉がと、

一応、この企画にうしろめたいものを感じつつも〈それとは別に、大陸を思うとき、なつかしさが切なくこみあげてくる。滅びたがゆえに、そこは一層、美しくきらめくのだ〉と、望郷の切なさを禁じ得ないのである。小林氏とて同じく多感の思春期を朝鮮で迎え過している。〔……〕望郷がないわけではない。望郷があればこそ〈内なる懐かしさ〉を仮借なく拒否するのである。（朴元俊「小林勝氏の急逝を悼む」『朝鮮研究』（1971 年 4 月号）49-50 頁）」

13　呉林俊「弔辞」『新日本文学』（1971 年 7 月号）75 頁参照。

14　呉林俊「亀裂の塔から降りるもの―小林勝の接点と持続について」『新日本文学』（1971 年 7 月号）112 頁

15　呉林俊「弔辞」『新日本文学』（1971 年 7 月号）76 頁

16　呉林俊『朝鮮人のなかの日本』（三省堂新書、1971 年）66 頁

17　『小林勝作品集』第 4 巻（白川書院、1976 年）365 頁

18　高峻石『朴憲永と朝鮮革命』（社会評論社、1991 年）53-54 頁

19　この小説に関しては、上田隆章「〈明治百年〉・〈戦後五〇年〉を撃つ火箭」『新日本文学』（1996 年 1・2 月号）90-92 頁、仲村豊「文学受け継がれるべき歴史への視座――小林勝「万歳・明治 52 年」『社会評論』（1997 年 8 月号）90-94 頁が簡潔に考察を加え、戦後 50 年が過ぎた時点での小林文学の意義を強調している。

20　朴裕河は、植民者について、「日本で食べるに困って流れてきた人々―国家による棄民たちでもあった」という側面があると指摘した上で、「しかし、支配者となったもと棄民たちは、かつての立場は忘却し、朝鮮人たちには支配を超えて脅威的な存在にもなる」と、植民者の二重性を指摘している（朴裕河上掲論文 48 頁）。

21　柾木恭介「小林勝の“朝鮮”」『新日本文学』（1969 年 3 月号）108 頁

22　磯貝治良「原風景としての朝鮮」『季刊三千里』（1982 年春号）213 頁

23　金時鐘「この苦き対話」『新日本文学』（1971 年 7 月号）154 頁

24　磯貝治良「原風景としての朝鮮」『季刊三千里』（1982 年春号）214 頁

25　磯貝治良「照射するもの、されるもの」「季刊三千里」（1982 年夏号）178 頁

26　後藤明生「グロテスクな〈記憶〉」『文芸』（1970 年 7 月号）207 頁

27「よく苦笑させられることの一つに、かつての『朝鮮植民者』から表示される、手放しの親近さがある。

「どこそこに×十年も居ってねえ！　いやあ朝鮮はなつかしいよ！」

と、まるで同郷の誼を分かち合わんばかりに打ちとけられるあれである。先進的な意識を社会変革に賭けているという人も、そうでない人も、この『朝鮮』の表出に差異が見られることはまあない。

しんそこなつかしむのである。この稚児にも等しい無心さに出会うと、私などまったくもってお手あげだ。とたんに『日本人』が透けてしまって、お人好しの隣人だけがそこに私と対座している。おきまりの私の苦笑が、むしろ私へ向けて、私の内部で青白く引きつる刻が始まる。気安さが苦渋であり、その苦渋が気安さでもある関係。いったい私は私にとって何者なのか？（金時鐘「私の座位からの背中あわせの独白」『朝鮮研究』（1972 年 9 月号）3 頁）」

参考文献

愛沢革「想像力の基点としての〈朝鮮〉――小林勝論・序説」『新日本文学』（1973 年 11 月号）

安宇植「小林勝と朝鮮」日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』（毎日新聞社、1978 年）

磯貝治良『戦後日本文学のなかの朝鮮韓国』（大和書房、1992 年）

高峻石『朴憲永と朝鮮革命』（社会評論社、1991 年）

呉林俊『朝鮮人のなかの日本』（三省堂新書、1971 年）

―――『日本語と朝鮮人』（新興書房、1971 年）

尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971 年）

金時鐘『「在日」のはざまで』（平凡社ライブラリー、2001 年）

小林勝『小林勝作品集』全 5 巻（白川書院、1975-1976 年）

高崎隆治『文学のなかの朝鮮人像』（青弓社、1982 年）

高澤秀次「小林勝論――植民地朝鮮の日本人」『言語文化』17 号（明治学院大学言語文化研究所、2000 年）

南富鎮『近代文学の〈朝鮮〉体験』（勉誠出版、2001 年）

朴裕河「小林勝と朝鮮――『交通』の可能性について」『日本文学』（2008 年 11 月）

原佑介「植民地二世作家小林勝と『内なる懐かしさ』への抵抗」『コリア研究』1 号（立命館大学コリア研究センター、2010 年）

村松武司「植民者作家の死――小林勝について」『朝鮮研究』（1972 年 3 月）

渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮　文学的考察』（岩波書店、2003 年）

Jjogbali and *Oksuni*: Colonists and the "Other" Korea within Kobayashi Masaru's Literature

HARA Yusuke

Abstract:
In the postwar era, Kobayashi Masaru (1927-1971), who had been a second-generation colonist to Korea and still identified himself as a colonist, wrote many novels set in colonial Korea based on his own experiences there. In the novels, a distinct pattern can be seen in the narrative structures as well as the depictions of colonized Korean people and their relations to the Japanese. More specifically, in many of the novels, Kobayashi illustrates how events that undermine colonial rule, such as the Korean independence movement and Japan's defeat in the Pacific War, serve as a spark that exposes the true, hostile face of Koreans who previously appeared to be submissive to the Japanese rulers. By tracing this process, Kobayashi brings to light the fear and guilt that had been deposited in the Japanese colonists' psyches. In doing so, he attempted to recapture the authentic otherness of Koreans, who had been represented within a polarized colonial discourse as either submissive, assimilated colonial subjects or rebellious malcontents (*futei senjin*).

Keywords: Kobayashi Masaru, colony, Korea, postwar Japan, colonialism

「チョッパリ」とオクスニ
――小林勝の文学における植民者と「もう一つの」朝鮮――

原　　佑　介

要旨：
朝鮮植民者二世作家小林勝〔1927-1971〕は戦後、自身の植民地体験を土台として植民地朝鮮を舞台とした小説を多数書き残した。彼の文学における植民地期の朝鮮人たち、彼らと日本人主人公との関係、そしてそれを叙述する物語の構造には、繰り返される特定の型が見られる。その多くでは、朝鮮人による独立運動や日本の敗戦など、植民地支配を揺るがす事件が契機となり、それまで日本人に対して従順であるかのように見えた朝鮮人が突如として敵対的な真の容貌をさらけ出す過程が描かれる。小林は、この過程を叙述することで、日本人植民者の内面に沈殿するやましさと恐怖をえぐり出した。それとともに、従順な帰化臣民的イメージ、そうでなければ「不逞鮮人」的なイメージという両極的な植民地主義言説いずれかのうちに封じこめられている朝鮮人を、日本人とは異質な存在として再度とらえ直そうとした。